

ヴィクトリア朝の女性文化のリーダーたち

E.L. リントンとA.M. ケアード

木原 貴子・依岡 道子*

Leading Women in Victorian Journalism:

E.L. Linton & A.M. Caird

Takako KIHARA and Michiko YORIOKA

19世紀のイギリスにおいて、新しい考え方を持った女性たちのなかには知的専門職への道を要求したり、社会的・政治的変革を求めて積極的に自ら運動を起こした女性がいた。その一方、新聞や定期行物を介して自らの意見を公にする方法をとった女性もいた。19世紀の半ばには、新聞・雑誌などの出版が多岐に及び、読者層が拡大したとは言え、活躍した女性として名前が知られているのは、小説家・批評家のジョージ・エリオット(George Eliot)や、少し時代が下って、ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)くらいであった。ジャーナリズムにおいては19世紀中ごろからハリエット・マーティノー(Harriet Martineau)、フローレンス・フェンウィック-ミラー(Florence Fenwick-Miller)、エリザベス・リン・リントン(Elizabeth Lynn Linton)などが活躍し、彼女たちの書評、論評、評論などは、女性文化・政治、社会、経済、家庭、教育、芸術への影響が大きかったと考えられる。

上記の女性たちの他にも、多種多様の新聞雑誌において、婦人参政権から教育、家庭の主婦・母親のあり方、女性のファッション、風俗などさまざまな分野への寄稿を職業にしていた女性はいる。しかし、女性読者にとってのオピニオン・リーダーとして活躍したジャーナリストと言えるのは、エッセイスト、評論家、批評家、コラムニスト、論説者(essayist, reviewer, critic, columnist, leader writer)のように、自らの意見を公にしていた女性たちであろう。

19世紀のジャーナリストとして最も知名度の高い女性の一人として、まず、マーティノーの存在がある。彼女は論説者、評論家、エッセイストであり、経済学、社会学を専門分野としている。その評論、論説はヴィクトリア朝を代表する雑誌、『コーンヒル・マガジン』(Cornhill Magazine)、『エディンバラ・レビュー』(Edinburgh Review)、『ハウスホールド・ワーズ』(Household Words)などに掲載されていた。バーバラ・オンズロー(Barbara Onslow)の著書『19世紀英国の新聞・雑誌の女性たち』(Women of the Press in Nineteenth-Century Britain, 2000)のなかで述べられているように、マーティノーは1852年から1866年までほとんど毎日、『デイリー・ニュース』(Daily News)で論説を書き続けていたが、さらに特筆すべきは、政治問題の発言をも回避しなかったということであろう(“She did not avoid political subjects and was a powerful supporter of the abolitionist cause.” 230)。

フローレンス・フェンウィック-ミラーもまた、編集者やコラムニストとして40年間も、エネルギーにジャーナリズムの世界で活躍していた。1895年には女性雑誌『ウーマンズ・シグ

*本学非常勤講師

ナル』(*Woman's Signal*)の経営と編集の仕事を引き継ぎ、婦人参政権や女性問題を積極的に取り上げ、フェミニストの活動を支持しながら雑誌の存続に貢献したのである。また、『イラストレーテッド・ロンドン・ニュース』(*The Illustrated London News*)の女性欄 *Ladies' Column*)にも彼女の記事が掲載されていた。『レディーズ・ピクトリアル』(*Lady's Pictorial*)、『ヤング・ウーマン』(*Young Woman*)、『ウーマンズ・ワールド』(*Woman's World*)などには、フリーランサーとして自由に投稿している。

ジャーナリズムにおける最初の女性の一人と言われているのがエリザベス・リン・リントン(1822-1898)である。彼女はもともと小説家になろうと、小説の執筆を始めたが、雑誌での記事が認められることになった。彼女は数多くの評論を書いてきたが、特に、彼女を知らしめたのは「奔放な女性：政治家として」(“ *The Wild Women as Politicians* ”)である。この評論は、1891年に雑誌『十九世紀』(*Nineteenth Century*)に掲載され、大きな反響を呼んだ。さらに、この評論に対する反論である「所謂『奔放な女性』の擁護」(“ *Defense of the So-Called 'Wild Women'* ”)がその翌年、同誌に掲載されるに至った。この反論は若いジャーナリストでフェミニストのアリス・モナ・ケアード(*Alice Mona Caird*, 1854-1932)によって書かれたものであり、二人の間でヴィクトリア朝における女性論をテーマにして、雑誌の紙面上の論争が行なわれたことは、評論の内容とともに、この時代における画期的な出来事である。

本論では、雑誌『十九世紀』における二人の女性ジャーナリストの評論を分析し、その争点を検証するとともに、二人がオピニオン・リーダーとしていかに女性の意識の覚醒、女性文化の高揚に貢献したかを考察する。(依岡)

1. エリザベス・リン・リントン (Elizabeth Lynn Linton, 1822-1898)

エリザベス・リントンは、ヴィクトリア朝の小説家でありジャーナリストであったが、イギリスでジャーナリストとして自立できた最初の女性のなかの一人であった。1848年、彼女が初めてジャーナリストとして採用されたのは『モーニング・クロニクル』(*Morning Chronicle*)であった。小説家志望であった彼女は、当初、長編小説も執筆し出版されたものの、不評であった。そのためジャーナリストとしての成功の方が早かった。1860年から1867年の間に『オール・ザ・イヤー・ラウンド』(*All the Year Round*)、『コーンヒル』、『サタデー・レビュー』(*The Saturday Review*)などのジャーナルに200以上の記事が掲載されていたと言われる。彼女が執筆する分野は、女性に関わる問題、社会・政治問題の論評、文学評論など多岐にわたる。1850年代に入ると、女性の権利の問題が熱心に論じられるようになり、1851年には、J.S.ミル夫妻(*Mr and Mrs John Stuart Mill*)の共同執筆による論文「婦人参政権」が『ウェストミンスター・レビュー』(*Westminster Review*)に掲載され、さらに1866年には同じくJ.S.ミルがイギリス議会で婦人参政権を求めて請願書を提出し(その翌年議会で否決されているが)婦人参政権の運動を中心に、イギリス各地で組織が結成されたのである(奥田101)。

リントンの伝記『ヴィクトリア朝イギリス女性に敵対する女性』(*Woman against Women in Victorian England*, 1987)の著者であるナンシー・アンダーソン(*Nancy Anderson*)によれば、19世紀半ば、女性の権利に関する彼女の立場は、どっちつかずのところがあったということである。そして、表向きは自らを女性解放支持者と見ているところがあったようだと言っている。

Eliza's position was at this time equivocal. She ostensibly saw herself as an advocate for women's emancipation. In the radical English Republic, she published in 1854 a stirring article praising Mary Wollstonecraft, whose 1792 *A Vindication of the Rights of Woman* was still considered revolutionary. In this article, Eliza declared that there was no woman "stronger, more independent, or more noble, than Mary Wollstonecraft. . .practically asserting by her own life the truth of her equality with man. . . ." (Anderson 70)

後には、婦人参政権の運動に情熱を注ぐフェミニストの行動に対して強烈な反対の意見を述べているが、1850年代のリントンは、女性の権利を主張したウルストンクラフトの活動を自分の生き方を通して男女の平等を証明していると捉え、賞賛の記事を載せている。

19世紀後半になって、一時退潮していた、婦人参政権の運動が再燃し始め、女性の政治的活動に関わる賛否両論さまざまな評論がみられるようになった。ジャーナリストとしての経歴の終わりに近い1891年、『十九世紀』の9月号に掲載された「奔放な女性 - 政治家として」と題する評論において、リントンは政治活動に熱中する女性を手厳しく批判している。引き続き同誌10月号にも、「奔放な女性 - 社会の反乱分子として」("The Wild Women: As Social Insurgents")という記事が掲載されている。彼女の評論がフェミニストたちを刺激し、彼女たちの反論を促し、女性論に関して読者の意識の高揚に貢献することになるのである。

1845年自立を求めて生地の湖水地方から単身ロンドンに出てきたころのリントンは、ウルストンクラフトのように自立した女性を目指し、また、ジャーナリストとして活躍の場を獲得したのであるが、参政権を中心に展開する女性の政治活動に関する彼女の評論の厳しさは、いかなる理由によるかということに興味をもたれる。リントンが女性の政治的活動を是認しない理由を彼女の評論から読み取りたい。

評論「奔放な女性 - 政治家として」の冒頭において、リントンは彼女が命名する「奔放な女性」を明らかにしている。

All women are not always lovely, and the wild women never are. As political firebrands and moral insurgents they are specially distasteful, warring as they do against the best traditions, the holiest functions, and the sweetest qualities of their sex. (Linton 79)¹⁾

「奔放な女性」とは政治に情熱を燃やす女性や道徳的反乱分子だとしている。また、彼女たちは女性生来の、最良の伝統や神聖な役割、優しさという美德に反するような行動をとり、闘う女性であると指摘する。彼女たちがとる行動を性的倒錯とみなし、ユーモラスな表現であるが、活動家の女性らしくない行動を揶揄するようなことばで身体的特徴を、「女性のひげの生えたあご、低い声、平らな胸、貧弱な腰」("bearded chin, the bass voice, flat chest, and lean hips of a woman" Linton 79)と述べている。そのような女性たちは不快な感じを与えるだけでなく、世間の人々に決して好ましい印象を与えないと考えている。

「奔放な女性」が忌避しているのは、生来女性に課せられてきた義務や制約だと彼女は述べている。その義務と制約の局面として、主として結婚と母性という2つ観点から論じられている。男女二人の人生の結合である結婚において、古い形式である「一方の側の専制」("one-sided

tyranny”)。すなわち、夫による妻の支配を「奔放な女性」たちは拒絶しているとみなす。また、母性については、本質的に女性に存在するものであるのに、「奔放な女性」はそれを不名誉と考えているというのである。このような「奔放な女性」たちの行動の目的は、政治に直接影響を及ぼすことであり、女性としての責任を回避し、さらに男性の支持を得ようとしているとリントンは考える。従って、政治的活動に騒々しく熱狂する女性は、安定した社会を脅かし民族の繁栄も脅かすとみなしている。

女性の権利の主張には、かつてはそれほど批判的ではなかったはずのリントンであるが、女性が政治活動に参加することをなぜ認めようとしなかったのだろうか。その根底をなすリントンの女性観を探ってみよう。

Be it pleasant or unpleasant, it is none the less an absolute truth the *raison d'être* of a woman is maternity. For this and this alone nature has differentiated her from man, and built her up cell by cell and organ by organ. The continuance of the race in healthy reproduction, together with the fit nourishment and care of the young after birth, is the ultimate end of woman as such; and whatever tells against these functions, and reduces either her power or her perfectness, is an offence against nature and a wrong done to society. (Linton 80)

好むと好まざるとにかかわらず、母性が女性の「存在理由」(“the *raison d'être* of a woman”)なのであり、これが絶対的な真実であるとする。自然は女性の細胞、器官のひとつひとつをそのために作っているのであるから、女性の重要な役割は子どもを健全に養育し、栄養を与えることであり、それによって民族の存続が可能であるとリントンは考えている。このような女性本来の役割に反する行為や女性の完全性を損なうものは、自然への冒涇であり、同時に社会に対する罪悪であると強く主張している。女性の政治的活動への異論の根拠は、それが女性の自然の姿に反するからである。

この評論において、女性の政治参加について批判のことは繰り返し述べているが、それは論理的というよりも主観的な意見の類であろう。例えば、揺りかごが投票用紙記入所の入り口をふさぎ、議会への道を閉ざしているのだから、老若いかなる年齢の女性にとっても、政治的争いに熱中し、騒動を起こすほど悲惨なことはないという(Linton 80)。このような表現は、婦人参政権運動に反対するリントンの独特の感情的な表現であろう。

母性とともな女性にとって家庭もまた女性が責任をもって守るべきものであるとリントンは考えている。妻の政治活動は平和と愛を意味する家庭を破壊するという。男性の仕事は家の外にあるのに対して、女性の責務は家庭の管理である。男性は過酷な一日の仕事を終えて、家庭に戻り、妻とともに幸せを感じるのであるが、妻が活動家として政治の厳しい世界に参加するならば、家庭の平和はありえないと考えている。リントンは妻が政治活動を行なう場合を想定して、次のように述べている。

Imagine the home to which a weary man of business, and an ardent politician to boot, will return when his wife has promised her vote to the other side, and the house is divided against itself in very truth. Not all

husbands and wives wear the same badge, and we all know miserable cases where the wife has gone directly and publicly counter to the husband. (Linton 81)

女性に参政権が与えられ、もしひとつの家庭で夫と妻の政党支持者がそれぞれ異なり、妻が夫の反対政党の候補者に投票するような状況が生じると、家庭がふたつに分裂する恐れがある。

このことはリントン自身の家庭、すなわち、夫との家庭生活と何らかの関わりがあるのではないだろうかという疑問を起こさせる。彼女は1858年ウィリアム・リントン(William Linton)と結婚している。ウィリアムはラディカルな彫刻家・出版者であり、エリザベスとは再婚で、前夫人との間に7人の子どもがいた。夫婦の間には習慣、階級、政治的信条などにおいて大きな相違点があり、1864年には離婚している。アンダーソンのリントン伝によれば、妻エリザベスは、夫の金銭感覚を非難し、お金が湯水のごとく消えて行くと言っている。一方、夫ウィリアムは妻の社交上の集まり、活動、特に彼の屋敷に集まる妻の社交グループ(特に、文学者たち)を快く思わず、妻を敬遠するようになっていった(“William for his part scorned Eliza's as ‘worldly, fashionable, frivolous, ungodly’... and he increasingly refused to join in their social world.” Anderson 90)。この集まりについては、間もなく、夫の方が正しかったことに妻エリザベスは気づくことになる。家庭における夫婦間の日常的な問題が、政治的信条に関わるとき、事態は深刻になる。先に見たように、夫婦間の政党支持の相違が家庭の亀裂を生むとするリントンの指摘は、現実に彼女が夫の間で体験していたことであることがわかる。

アンダーソンによれば、エリザベスが夫の共和制支持の立場を妻が共にしようとしなかったことにウィリアムは失望していたらしい。若い頃のエリザベスは、ヨーロッパ各地の自由主義への改革を支持していたが、結婚後、改革への夫のさまざまな活動には拒否の態度を示していた。彼女の考え方では、真の自由は旗や剣を振りかざして求めるものではなく、ゆっくりと着実に状況に即した過程を経て促進すべきものであるらしい。

William was disappointed that Eliza did not... share his deep republican faith... Eliza, who had been in her youth such a passionate defender of European national and liberal revolutions, now refused to join her husband's various revolutionary committees. She later explained that “true liberty comes by the slower process of growth and gradual fitness,” rather than by “that crude academic ideal of Liberty with sword and banner, wild hair and floating plumes, crying! ‘Death to the Tyrants!’ on the ramparts.” (Anderson 91)

女性の政治参加を認めようとしめない彼女の評論におけるリントンの論理の展開方法は、単純な二者択一に近いものである。政治が平和か、演説か家庭か、個人主義か愛情か、道徳的不毛か女性の特質とする自然が与えた豊かで貴重な人生か。女性はそれを選択せねばならないと指摘している。彼女の評論は男性・女性を上下関係においてみる単純な発想であり、フェミニストには不合理と思える理由を並べて、男女の生物学的な差異からそれぞれの役割や義務に順応するという従来の保守的な立場を繰り返している。

視点を男性の立場や男性の行動についても言及している。男性が友情を求めるのならば同性

に対して求めるのであり、女性に求めるのは純粋な心と真実の気高い愛であると言う。女性が権利を要求することによって、女性自身が「小さな男性」(“minor men”)になり、結局は、女性としての存在意義を失うことになる。男性の中には、女性の選挙権を支持する人もいるが、それは自分たちが常に女性より強い存在であると信じているからであり、現実とはかけ離れた、抽象的な正義論からくるものであると考えている。また、男性の中には、自分が男性的でないことで自分を尊敬できないから、偶像としての女性のスカートの中に入って、女性の権利を叫ぶような女々しい女性崇拜者の男性もいると皮肉をこめて批判している。そういった男性の行為は、「奔放な女性」の主張する詐欺のような「新しい道徳」を支持する男性であると言っている(“These are specially the men who uphold the imposture of the New Morality.” Linton 83)。

女性が参政権を獲得し、政治権力に直接参加することによって生じる問題を税金と戦争という視点から言及している。戦争に関しては、ヨーロッパの過去の戦争で最悪のものは女性が起こしたものだとし、女性が参政権を持つと、戦争は彼女たちの投票で決定されることも容易になり、さらに、彼女たちは税金も払わないし出兵を求められることはない。税金を支払わない女性が参政権をもつことを不当だと考えている。

男性、女性それぞれの生来の特質への言及の中で、その主たるものは女性の母性と道徳的な善良さであるが、政治的に為政者になった場合に見せる女性の側面として、「専制的」(“tyrannical”)と「個人主義的」(“individual”)の両面があると指摘する。しかし、それは幼い子どもに対する母親の態度にみられる絶対的な権威の行使であるとする。

This tyrannous temper is part of the maternal instinct which women have inherited for such countless generations. Not authority in the world is so absolute, so irresponsible, as that of a mother over her young children. (Linton 85)

イギリス民族の存続には、母性の本能といえる専制的な気質が不可欠であり、母親の絶対的な権威こそが子どもを守る最も安全な武器だとしている(“By the depth and strength of the maternal instinct is the race preserved, and by this alone; and the absolute authority of the mother is the child's safest shield.” Linton 85)。リントンはそのような気質を母性の大切な要素とみなしているが、その一方では、それが政治的活動に現れた時に生じる専制的政治の側面として危惧している。

リントンの論評では、社会・家庭などにおける人間関係は、常に男女の生まれながらの性差に基づいて判断されており、多少の例外は認めながらも、それぞれの領域の不可侵が平和と安定を守るものと見ている。

This question of woman's political power is from beginning to end a question of sex, and all that depends on sex its moral and intellectual limitations, its emotional excesses, its personal disabilities, its social conditions.(Linton 86)

しかしながら、彼女は政治運動に参加する女性の能力を全面否定しているわけではないし、男

性がすべて女性よりも能力があるとは考えているわけでもない。下の引用にみるように、男性の知性、道徳性はまだそれほど低くはないし、また、新しい時代を創造し、新しい社会秩序を作るほど知的能力は女性にはないとしながらも、彼女自身、時代が動いていることに敏感であり、やがて女性の活躍できる時代がくることを予想していると受け取られる。

Our men are not yet at such a low ebb in brains or morals as to need dispossession; not, pace our platform orators, are the wild women, though undeniably smart, of such commanding intelligence as to create a new epoch and justify a new social ordering. (Linton 88)

リントンがジャーナリストとしてさまざまな評論を世に示してきたが、その初期には、ウルストンクラフトのように、女性の自由を求める運動に賛意を表わすなど、イデオロギーにおいてラディカルなところがあつたようにみえる。また、結婚後、ウィリアムとの間の問題を通して、離婚問題、政治的信条など、女性の立場にもジャーナリストとして理解を示すことがありえたのではないかと思われる。しかしながら、婦人参政権のような政治的な問題における考え方の転換の発端は、どこにあったのかという疑問が生じる。中年期に入り、ジャーナリストとしての保身のための保守的な態度への傾倒とも受け取れるが、アンダーソンは次のように述べ、若い頃のリントンのラディカルなところは、イデオロギーに純真に傾倒していたことによるというよりも、父親への反抗に起因しているとみなしている (“ Her youthful radicalism had been rooted in her rebellion against her father rather than in authentic ideological commitment. ” Anderson 91)。

若い頃小説家を志望し、単身ロンドンに滞在して、図書館で独学し、ジャーナリストとして自立したリントンは、女性としての苦勞を経験し、女性の新しい生き方にも理解をもっていたのではないかと一般に思われるかもしれない。しかしながら、ジャーナリスとしての後半、女性の政治的活動としての参政権運動やフェミニズムの動きなどに関して、新たに保守的な評論を公にすることになったことは、若い頃の父への反抗と同様、夫との政治的衝突と離婚などによる自らのアイデンティティの宣言ともとらえられる。このことは、彼女の人となり、秩序への希求、深奥に存在する階級意識と合致していると思われるが、彼女の小説や多方面の論評、伝記などを通してその点を分析する必要があると考える。(依岡)

2 . アリス・モナ・ケアード (Alice Mona Caird, 1854-1932)

1891年に『十九世紀』に掲載された「奔放な女性」という記事の中で論じられたリントンの女性論に対し、アリス・モナ・ケアードは、同じく『十九世紀』の1892年5月号に「所謂『奔放な女性』の擁護」と題する記事を書いている。ケアードの反論の姿勢は、冒頭の一文「リン・リントン夫人に『奔放』と呼ばれた女性たちが最初に感じた衝動は、おそらく3本の情け容赦ない記事の中で彼女から浴びせられた非難を否定することであつただろうが、よく考えてみると一連の彼女の言葉には矛盾だけでなく虚しさが見えてくるのであつた」(Caird 811)という言葉に表れている。²⁾すなわち、20頁にわたる記事の中で何度となく繰り返されるのであるが、ケアードの目的は、リントンの意見を単に否定することではなく、リントンの主張と自分の見解のいずれが「真実」に近いのかを検討すること、つまり、女性に関する様々な言説において

「真実」を探究することなのである。

1880年代以降のフェミニスト運動の発展におけるケアードの活躍は、多くの批評家が認めるところであるが(Flint 304; Heilmann 67; Ledger 22)、バーバラ・ケイン(Barbara Caine)は著書『ヴィクトリア朝のフェミニストたち』(*Victorian Feminists*)の中で次のように彼女を評価している。

Cicely Hamilton, Mona Caird, Sarah Grand and Olive Schreiner were just four of the prominent supporters of the women's movement who attacked Victorian feminine ideals, insisted on recognition of the servitude women endured in marriage, and demanded a new approach to women's lives, work, and relationships. (Caine 254)

ここでは、『取引としての結婚』(*Marriage as a Trade*, 1909)の著者シスリー・ハミルトン(Cicely Hamilton)や『女性と労働』(*Woman and Labour*, 1911)の著者オリヴ・シュライナー(Olive Schreiner)などとともに、ケアードはヴィクトリア朝を代表する女性解放運動のリーダーの一人と見なされている。ジャーナリストであり文筆家であったケアードは、小説や短編集、旅行記や動物実験反対に関する小冊子なども手がけているが、女性問題、とりわけそれまでにない視点から結婚や家庭、女性の性に関する問題を取り上げたことが彼女の大きな特徴である。すなわち、「夫婦間における性の不一致、避妊、望まれない妊娠、シングルマザー、家事労働の賃金化、公共の育児制度、婚姻関係破綻後の不倫の自由や権利」(Heilmann 67)など、これまではむしろ避けられていた女性に関わる問題を討論されるべき議題として提起したのである。

ケアードの名前を一躍有名にしたのは、『ウェストミンスター・レビュー』の1888年8月号に掲載された「結婚」(“ Marriage ”)と題された記事である。この中で彼女は、結婚後の性生活と出産において、女性の肉体は(夫やこどものものではなく)あくまで女性のものであるという認識がなければ、結婚は夫婦が一緒になって墮落すること(“ the united degeneration ”)か、或いは、女性性が零落してしまうこと(“ the degradation of womanhood ”)であると述べ、結婚は「煩わしい失敗」(“ a vexatious failure ”)であると結論づけたのである。この記事の意義と当時の人々に与えた影響の大きさに関して、ハイルマン(Ann Heilmann)は次のように述べている。

With this virulent attack on the mainstay of bourgeois respectability, Caird had hit one of the most sensitive areas of Victorian middle-class morals, sparking off a public debate of surprising dimensions. By the end of September, *the Daily Telegraph*, which had initiated an open correspondent on the subject, had received some 27,000 letters.... (Heilmann 70)

『ウェストミンスター・レビュー』に掲載されたケアードの記事は、これまで道徳上触れることが許されなかった夫婦の、そして、女性の性の根幹に関わる問題に疑問を投げかけたのである。そして、その反応は驚くべき広がりを見せ、9月末には『デイリー・テレグラフ』(*Daily Telegraph*)に議論の場を移し、「結婚は失敗か?」(“ Is Marriage a Failure? ”)と題された

読者投稿欄が設けられ、およそ2万7千通もの手紙が寄せられたのである。このように、これまで抑えられ、隠蔽されてきた女性の意識や感情を表出させたケアードは、イギリスのフェミニストの中でも「悪名高い」(“notorious,” Ledger 22: Heilmann 67)と呼ばれる存在になったのである。その意味で、ケアードはリントンが非難する「奔放な女性」の一人なのである。

ケアードの「奔放な女性」に対する「擁護」は、リントンの意見に対して、単に感情的に反応し、直接攻撃するのではなく、ケアード自身の女性論を展開することで反論を試みているようである。例えば、「男勝り」な女性運動家に対するリントンの非難に関して、ケアードは反対するどころか、「男性の習慣ややりかたを模倣し、荒々しい争いに参加する機会を掴むことで、自由への要求を主張しようとする間違いを犯している」(Caird 814)と述べ、むしろ男性の真似をする女性に苦言を呈している。しかし、実際には競争に明け暮れる乱暴で無益な生き方をしている男性を非難しているのである。また、女性の家事労働と就労の問題において、女性の本分は家事と育児に専念し家庭を守ることだとするリントンの意見に対して、今や女性は自立を求め、家事ではなく、自立するために報酬を得られる仕事を求めていると、むしろ女性の意識の変化を指摘している。その上で、就労に関して、男性と同様に「女性たちも機会を共有したいという人間として当然の権利を望むならば、すなわち、もし自立したいという権利を望むのならば、社会はどんな権利で彼女たちの要求を拒否するのだろうか」(Caird 815)と、責められるべきは「社会」であると明言している。さらに、非難の鋒先は、そうした社会を作り上げてきた男性に向けられている。

Men are living lives and committing actions day by day which imperil and destroy the well-being of the race; on what principle are women only to be restrained? Why this one-sided sacrifice, this artificial selection of victims for the good of society?

Society has no right to exact these sacrifices ; every member of it must stand equal in its sight, if it would claim the name of a free state.(Caird 815)

「人類の幸福」を脅かし、破壊しているのは男性である。なぜ女性が「社会のために」犠牲にならなくてはいけないのか。自由な社会という限り、皆平等であるべきであり、社会は片寄った犠牲を強いる権利はない。ケアードの非難の対象は明確である。すなわち、問題なのは、自由と平等を唱えながら、女性を虐げることで成り立っている男性社会なのである。

ケアードはリントンとの意見の対立を以下のように分析している。

The quarrel, in fact, between Mrs. Lynn Linton and her opponents is simply the time-honoured quarrel between yesterday and to-day, between reaction and progress, between decaying institutions and the stirrings of a new social faith. (Caird 828)

ケアードにとって、リントンとの論争は、過去と現在、新旧間の論争である。時代の変化の中で、新しい信条が胎動し、古いものが衰退していく過程で生じる伝統的な衝突なのである。それゆえ、リントンの感情的な発言に対しても、ケアードは経験に基づく「単なる意見の相違」(Caird 813)と見なし、反論は意味がないという姿勢を取っている。

しかしながら、記事には、一見リントンに対する直接的な反論をしているように見える箇所を認めることができる。例えば、夫は自分と政治的に意見が異なる妻に耐えられないというリントンの意見に対し、男性がそんなに「子どもっぽい」とは思わないし(Caird 823)、自分が有名になるよりも偉大な夫の妻や英雄の母親になる方がよいというのは「好みの問題」にすぎないであろうと述べている(Caird 823)。また、「奔放な女性」の容姿に対する非難は腹を立てた子どもの喧嘩のようなものであり(Caird 824)、「記事を書くのはこのうえなく女性らしくない仕事」という意見に至ってはリントンの自己否定に他ならないと断じている(Caird 824)。しかし、こうしたリントンに対する批判も、実は、男性に対する非難なのである。もし女性が政治的な能力を発揮すると家庭の平和が実現できないのだとすれば、男性には「礼儀と忍耐」が欠如しているし、有名な妻を持つ夫が惨めとを感じるならば「子どものように負けることが嫌で、分別のある人がわざと勝たせてあげなくてはならないような嫉妬深い男の子」(Caird 823)のようだと揶揄している。そして、夫婦間の友情を説くリントンの説に対しては、「支配者の権利と従属者の義務を生み出す間違っただ感情」がある限り夫婦間の友情はあり得ないと、男女間における上下関係を問題視している(Caird 827)。しかし、「今日の女性の苦しみは、過去の苦しみとその継続の上に築かれている」と指摘し、女性を抑圧する社会の代弁者という立場からの発言に対しては、「リン・リントン夫人の女性に対する嘲笑や非難は、たとえすべて完全に正しいとしても、どんな力や意味があるだろうか」と厳しく反論するのである(Caird 821)。

リントンの記事の中で、彼女が最も重要視している問題は「母性」である。リントンによると、女性は子どもをもつことに全身全霊を捧げる必要があったし、これからもそうである。そして、「自然」の定めた「女性の存在理由」は「母性」なのである。それに対し、ケアードは次のように激しく非難する。

To the time-honoured argument that nature intended man to be anything and everything that his strength of muscle and of mind permitted, while she meant woman to be a mother, and nothing else, the rebels reply, that if a woman has been made by nature to be a mother, so has a cow or a sheep; and if this maternal capacity be really an infallible indication of function, there is nothing to prevent this reasoning from running down-hill to its conclusion, namely that the nearer a woman can become to a cow or a sheep the better. (Caird 817-8)

男性は体力と精神力が許す限り何にでもなれるが、女性は母親にしかなれないというのが「自然」の意図であるならば、女性は牛や羊という家畜と同じということになるのではないか。ケアードは、女性と母性の結びつきは自然の掟と主張し、女性のあらゆる他の権利を拒絶する旧弊な考え方を正面から非難している。そして、女性が母親になればいいのであれば、なぜ女性にも多くの感情や知性が備えられているのか(Caird 818)(多くの男性が様々な仕事に就く一方で)なぜ女性が一樣に「母親」という仕事を強いられているという不自然さに誰も気付かないのか(Caird 820)と疑問を投げかけている。さらに、自然が女性に母となることを望むというのであれば、なぜ男性は父親という役割に全身全霊を注がないのか(Caird 818)という反論を行なっている。

We know that although men have been fathers from the beginning of human history, they have not made fatherhood the keynote of their existence.... Women have been forced, partly by their physical constitution, but more by the tyranny of society, to expend their whole energies in maternal care, and this has been the origin of a thousand evils.... (Caird 819)

自然の摂理として、女性が母親であるべきならば、同様に男性は父親でなくてはならないはずである。それにもかかわらず、男性はその掟を破り、勝手な生き方をし、女性だけを母親という役割に縛り付けている。諸悪の根源は、そうした男性が作り上げた社会である。なぜならば、男性は自分たちに有利な「伝説を何度も書き続ける特権を享受する」(“man himself is privileged to write and rewrite the legends,” Caird 818) 立場にあり、しかも、無意識に自分たちのそうした力を行使しているからである。自然の摂理とはまやかしであり、男性が捏造した考えにすぎないのである。

...how false are all the inferences of phrases such as ‘Nature intends,’ ‘Nature desires;’ she intends and desires nothing she is an abject slave. Man intends, Man desires, and ‘Nature,’ in the course of centuries, learns to obey. (Caird 820)

男性たちは「自然崇拜」という名目を掲げるが、実は自然は「何も意図せず、何も望まない」。むしろ、男性に「服従」させられる「惨めな奴隷」である。意図し、願望するのは「男性」なのである。

ケアードの最大の関心事は、社会における男女のあり方である。それゆえ、ケアードの女性を巡る言説における非難の対象は、リントンという一人の反フェミニストの女性ではなく、彼女の考え方を支持し、助長してきた当時の社会であり、そうした社会を作り上げてきた男性たちなのである。(木原)

3. まとめ

1892年当時、リン・リントンは70歳、一方のモナ・ケアードは38歳であった。ケアードが記事の中で何度も述べているように、彼女にとってリントンは「旧い秩序に従う女性」(“the women of the old order”)の代表者であり、ケアード自身は「新しい秩序に従う女性」(“the women of the new [order],” Caird 813)の代表であった。80年代以降すでに女性の権利を求めるフェミニストたちの主張が『ウェストミンスター・レビュー』や急進的フェミニスト機関紙『イングリッシュ・ウーマンズ・ジャーナル』(*Englishwoman's Journal*)など数多くの雑誌の紙面を賑わわせ、また、既婚女性財産法の成立(1882)など実質的な活動も活発化していた。当時の社会事情を鑑みれば、リントンの女性論が伝統に囚われた時代遅れのものとして評されてもしかたのないことであろう。例えば、男性と女性の関係、とりわけ夫婦の関係に関して両者の意見を比較するならば、リントンは、人間関係には絶えず上下関係があることを前提とし、男性上位と女性下位という当時の状況を容認し、安定した社会を維持するためにもそうした関係を維持するべきであり、逆転する時期には至っていないと述べている。一方、ケアードは、男性

上位と女性下位という現状認識においては同様であるが、その関係の改善を説いている。しかし、彼女が望むのは、単なる立場の逆転ではなく、(抑圧する者/抑圧される者という)従来の関係を解消し、男性と女性が⁷ともに立つか、ともに倒れるかの結びつきにある兄弟、姉妹」(Caird 829)という並列的な位置関係を築くことである。

しかし、本論で取り上げた二人の論争に関して最も重要な点は、古い考えが新しい考えに取って代わられるという時代の変化だけではなく、二人の女性批評家によって「女性」の生き方 - 結婚や家庭、とりわけ母性 - に関する論争が、読者を巻き込みながら、『十九世紀』という紙面で公に行なわれたという点にあるのではないだろうか。すなわち、女性批評家が、大衆に影響力を持つ文化的・社会的オピニオン・リーダーとして、揺るぎない地位を確立したことを意味しているのである。

本論では、「奔放な女性」と「所謂『奔放な女性』の擁護」と題された二つの記事の内容を詳細に分析することによって、リントンとケアードという二人の女性批評家の女性論を呈示した。しかし、これらの記事は、ジャーナリストであり小説家であった二人の文筆家たちの女性に関する考えをほんの断片的に語っているにすぎない。今後は、それぞれの評論で展開される独自の女性論を、また、そうした思想を反映している小説の分析を、伝記的背景や当時の社会的背景を鑑みながら、行なっていく予定である。(木原)

注

1. 以降、リントンの「奔放な女性：政治家として」からの引用は、括弧内にLintonと記し、頁数を付す。
2. 以降、ケアードの「所謂『奔放な女性』に対する擁護」からの引用は、括弧内にCairdと記し、頁数を付す。

Reference

- Anderson, Nancy Fix. *Woman against Women in Victorian England*. Bloomington and Indianapolis : Indiana University Press, 1987.
- Beetham, Margaret. *A Magazine of Her Own? : Domesticity and Desire in the Woman's Magazine, 1800-1914*. London: Routledge, 1996.
- Blain, Virginia, Patricia Clements, Isobel Grundy. (ed.) *The Feminist Companion to Literature in English : Women Writers from the Middle Ages to the Present*. London: Batsford, 1990.
- Bilston, Sarah. *The Awkward Age in Women's Popular Fiction, 1850-1900*. Oxford: Clarendon Press, 2004.
- Caine, Barbara. *Victorian Feminists*. Oxford: Oxford University Press, 1992.
- Caird, Alice Mona. "A Defence of So - Called ' Wild Women. '" *Nineteenth Century, a Monthly Review* 31 (May 1892): 811-829.
- "Marriage." *Westminster Review* 130 (August 1888): 186-229.
- "Ideal Marriage." *Westminster Review* 130 (November 1888): 617-636.
- "Morality of Marriage." *Fortnightly Review* 53 (March 1890): 310-330.
- Flint, Kate. *The Woman Reader 1837-1914*. New York : Oxford University Press, 1995.
- Heilmann, Ann. "Mona Caird (1854-1932): wild woman, new woman, and early radical feminist critic of marriage and motherhood." *Women's History Review* Vol. 5 No. 1 , 1996: 67-95.
- *New Woman Strategies: Sarah Grand, Olive Schreiner, Mona Caird*. Manchester and New York : Manchester University Press, 2004.
- Ledger, Sally. *The New Woman: Fiction and Feminism at the fin de siecle*. Manchester and New York: Manchester University Press, 1997.

- Linton, Eliza Lynn. "The Characteristics of English Women." (Part 1) *Fortnightly Review* 51 (February 1889): 245-260.
- "The Characteristics of English Women." (Part 2) *Fortnightly Review* 51 (February 1889): 363-376.
- "The Future Supremacy of Women." *The National Review* 5 (March 1885): 1-15.
- "The Girl of the Period." *Saturday Review* (March 1868): 339-341.
- "Modern Revolt of Women." *Macmillan's* 23 (December 1870): 142-149.
- "The Wild Women as Politicians." *Nineteenth Century* 30 (July 1891): 79-88.
- "The Wild Women as Social Insurgents." *Nineteenth Century* 30 (Oct.1891): 596-605.
- Nadel, Ira B, W.E. Fredeman(ed.) *Victorian Novelists After 1885*. (Dictionary of Literary Biography, Vol. 18) Michigan : Gale Research, 1983.
- Onslow, Barbara. *Women of the Press in Nineteenth-Century Britain*. London : Macmillan Press, 2000.
- Pearsall, Ronald. *The Worm in the Bud: the World of Victorian Sexuality*. New York : Penguin Books, 1981
- Shanley, Mary Lyndon. *Feminism, Marriage, and Law in Victorian England, 1850-1895*. New Jersey : Princeton University Press, 1989.
- Williams, Merryn. *Women in the English Novel, 1800-1900*. London: Macmillan Press, 1985.
- 奥田 暁子他 『概説フェミニズム思想史』 ミネルヴァ書房、2003年。
- 北條 文緒他 『遙かなるみちのり』 国書刊行会、1989年。